Euro-NARASIA | SERIAL REPORT〈第十一回〉

飛鳥・奈良と「汎ユーラシアのイラン文化」

青木健 Takeshi AOKI

14 キルギス・セミレチエ（七河地方）におけるゾロアスター教・マニ教遺跡（後篇）

『ユーロナラジア』第1号〜第8号、第14号で掲載して頂いた論考では、イラン高原のペルシア州を起点として、スイースターン、ソグディアナ、ホラズム、セミレチエと、東へ東へと旅を進めてきた。本稿では、前稿に引き続き、現在のキルギス北部に当たるセミレチエ（七河地方）の遺跡に焦点を当てたい。

＊　＊

❹イシク・クル湖（Ysyk-Köl）・・・セミレチエを調査する以上、シルクロード・ファン憧憬の地たるイシク・クル湖を逃す訳にはいかない。ここは、天山北路を通った場合、旅人が必ず立ち寄る「神秘の湖」である（写真1参照）。中国語では、冬でも凍らない不凍湖たるに因んで「熱海」と呼ばれたり（「あたみ」ではなく「ねっかい」）、透明度が水深20メートルを越えるに因んで「大清池」と称されたりしている。また、内陸湖にも拘らず、湖水が塩分を含むので、「鹹湖（かんこ）」とも表記される。キルギス語の「イシク・クル」は、「熱い海」の意に由来するらしい。但し、本当に熱くて温泉状態になっている訳ではなく、塩分の故に真冬に凍らないと云うだけである。残念ながら、ソグド語での呼称は分からないが、往時のソグド人キャラバンも、天山山脈北麓に幕営を構える遊牧民と通行料の交渉をしながら、このイシク・クル湖畔を行き交っていた筈である。

前号で言及したトクマクの街から幹線道路を東へ向かい、海抜高度１６００メートル付近（榛名山の山頂高度に近い）（写真２参照）まで上り詰めた地点に、忽然と面積６２００平方キロ（琵琶湖の９倍）を越える内陸湖が姿を現す。

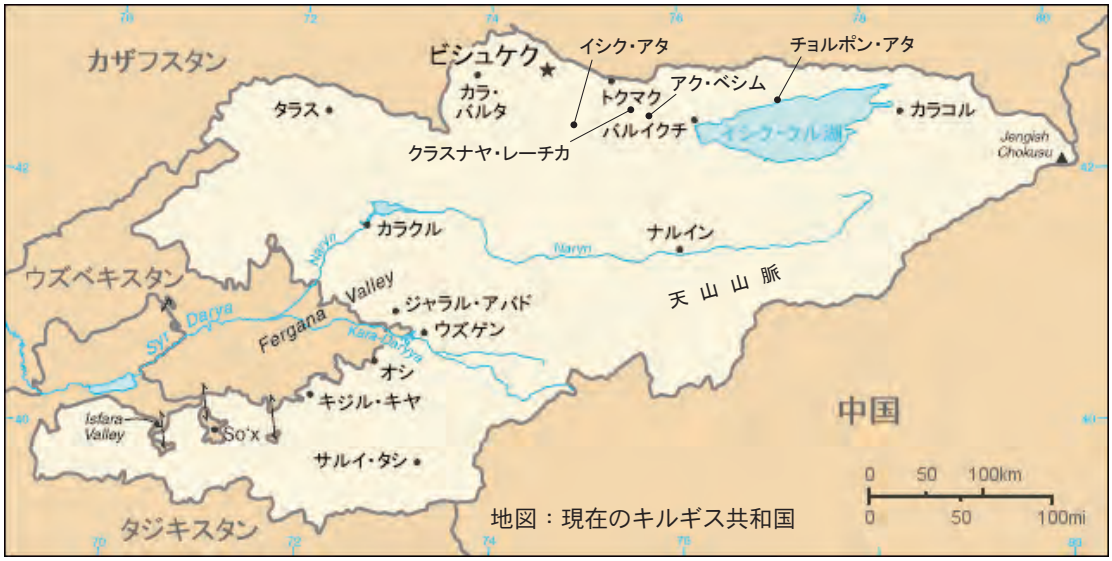
1．イシク・クル湖

８月末に訪れたと云うのに、天山山脈をこの高度まで上がると、すっかり初秋の気配が漂っていた。旅程に即して記すならば、我々は三日前まで、炎熱地獄のホラズム（『ユーロナラジア』第８号、第９号参照）に滞在していたのである。

このラピスラズリの如く青い湖のミステリーは、この湖から流れ出る河川が一本も無い点にある。この一帯を七河地方と称するくらいであるから、河川自体は沢山流れている。19世紀の地誌学者は、例えばそのうちで最大のチュー河が、イシク・クル湖を水源とすると信じて疑わなかった。しかし、意外にもチュー河はイシク・クル湖の数キロ手前で蛇行したあと、結局湖とは何の関係も有さずに砂漠の中に消えていく。この古代湖が堆積物で埋め立てられもせず、延々と数万年も存続している理由は謎である。

また、最近の中国での学説によると、唐代の詩人李白（７０１年～７６２年）の出身地は、従来考えられていたような中国四川省ではなく、このイシク・クル湖周辺とされている。即ち、李白は、軍事目的か商売目的で砕葉鎮に移住した漢民族（或いは漢化したトルコ系遊牧民）の子孫なのだそうである。この新説の真偽は

2．榛名山山頂と同じ高度



地図：現在のキルギス共和国

不明だが、中国内地とは違った豪放な中央アジアの風光が詩仙の精神を育んだということは、充分にありそうなくらい佳い景色だった。

＊　＊

夕刻になって、漸くイシク・クル湖北岸のチョルポン・アタの街の岩絵野外博物館に到着した。ここは、天山山脈からの氷河によって押し流された巨石群に描かれた古代の岩絵９００点と、遊牧民の石人数点が残っている太古の「聖地」である。野外の岩絵や石人を一つ一つ見詰めていると、紀元前２０００年頃にこの辺りで生活していた人々の精神が木魂してくるように感じられ、物言わぬ石人に込められた精神を仄かに感じられた（写真３参照）。

その後、チョルポン・アタ歴史文化博物館（写真４参照）を訪問し、イシク・クル湖の解説パンフレットを貰う。しかし、ロシア語版しかなく、一行のうち誰一人読めない。「湖底には古代の遺跡が水没していて、時々浜辺に貴重な遺物が打ち上げられる」との意味が、微かに分かる程度である。キルギスではペルシア語も通じないし、中央アジアを研究するならロシア語及びトルコ系言語に堪能でなくてはならないと思い知らされた。

ちょうど夕日が沈む頃になると、彼方の

３．イシク・クル湖畔の岩絵

天山山脈の姿が鏡のように透明度の高いイシク・クル湖に投影し、得も云えぬほどの神秘的な美しさだった。対岸の天山山脈を背景に、湖畔の放牧地で馬たちがパカパカ駆けているのを見ると、「天高く馬肥ゆる秋」との格言は確かに正鵠を射ていると思われた。また、上の句「雲浄くして妖星堕ち」は、日本で聞くと下の句との整合性が疑われたが、天山山脈の上空に一番星が瞬く頃に思い出してみれば、キルギスの秋の風物の叙景として成立する。この湖岸が古代の人々や遊牧民の「聖地」と崇められたのも当然であるし、旧ソ連時代には共産党要人の保養地に選ばれていたのも頷ける。当時は、この一帯は外国人の立ち入りが禁止されていた由である。

4．チョルポン・アタ歴史文化博物館

夕まだき、宿舎に辿り着いたのだが、巨大な白樺並木の区画の中に一戸建てのダーチャが整然と並ぶロシア風「ホテル」には驚いた（写真5参照）。ホテルの中で地形図を貰い、「迷わないように」と注意を受けたのは初めてである。因みに、その地形図で数えたところ、ダーチャの数は全部で174戸であった。これはもう、ホテルというよりは一つの街である。日が暮れてから、自分に割り当てられたダーチャに辿り着くのは相当の難事で、筆者は危うく「ホテル」内で遭難するところであった。

❺クラスナヤ・レーチカ遺跡（またはナヴェカト　Navekat）・・・翌日訪れたのは、アク・ベシム遺跡（『ユーロナラジア』第14号参照）から更に北西に40キロ進んだ地点にあるクラスナヤ・レーチカ遺跡である。3つの独立した城塞遺跡を1つに連結した複合遺跡で、規模の上ではバラサグンやアク・ベシムを凌ぐ。それにも拘らず、この遺跡の史的位置付けは不明で、単に6世紀～12世紀にシルク

5．イシク・クル湖畔のダーチャ

ロード交易で栄えたことしか分かっていない。ソグド語では「新しい城」＝「ナヴェカト」と呼ばれるに過ぎず、ロシア語では、「赤い河」＝「クラスナヤ・レーチカ」と呼称されるものの、現在では周辺に河などは見当たらない。

ここでの考古学発見といえば、３つの仏教寺院と、ネストリウス派キリスト教の十字架墓石が有名である。その中の第２仏教寺院（写真６参照）からは、旧ソ連時代の１９６１年に、全長14メートルの巨大な涅槃仏（ニルヴァーナ・ブッダ）が出土したものの、幾つかのパーツに切り刻まれて、サンクト・ペテルブルクに運び去られてしまった。折角の出土品が解体されたのは運搬の為であって、宗教遺跡に対する敵意ではないと思いたいが、貴重な文化遺産を毀損した事実に変わりはない。現在でも、―多分―そこに収蔵されている筈である。

しかし、我々の目的は、あくまでゾロアスター教遺跡である。残念なことに、そんなマイナー遺跡の案内板は立っていなかったので、余り当てにならぬ解説書を片手に、全域を徒歩で踏破することにした。崩れかけた城塞遺跡の中を悠然と牛や羊を追う遊牧民が闊歩

6．クラスナヤ・レーチカの第２仏教寺院

7．クラスナヤ・レーチカ遺跡の遊牧民

8．クラスナヤ・レーチカ遺跡の仏塔

9．クラスナヤ・レーチカのゾロアスター教徒墓地全景

10．クラスナヤ・レーチカ遺跡のネクロポリス

しているさまは、なかなか絵になる（写真７参照）。馬に乗った遊牧民が、我々が攀じ登った城塞遺跡の最頂部まで一気に駆け上がって来て、口笛を吹いて家畜の移動を確認している姿など、おそらくこの２０００年間変わっていないのではなかろうか？

仏塔とされる遺跡ばかりが立ち並ぶ中（写真８参照）、やっと、発掘報告書でネクロポリスと名付けられたゾロアスター教徒墓地（写真９参照）に辿り着くと、これはまた酷い保存状況である。禁止されているにも拘らず、周囲の住民が日干し煉瓦を焼く為に、此処の柔らかい土を掘ってしまうとかで、あたり一面に頭蓋骨や大腿骨、納骨器の破片が散乱している（写真10参照）。

正に、漢詩に

衆骨朽ちて　泥と成り
此の山　土多く白し

とあるのを地で行っていた。

或いは、杜甫が「兵車行」で詠った

君見ずや、青海のほとり
古来白骨、人の収むる無く
新鬼は煩冤し、旧鬼は哭す
天陰り雨湿れば、声啾啾

の「青海のほとり」を「赤河のほとり」（現存していないが）に改めれば、この光景通りである。多分、この人骨の主たちは、６～12世紀にこの地で亡くなったソグド人ゾロアスター教徒たちであろう。これでは死者の霊も浮かばれないと思うが、このような葬法が用いられていた以上、この街にまぎれも

11. クラスナヤ・レーチカ遺跡の拝火神殿？

ないゾロアスター教徒コミュニティーが存在していたことは確認できた。

この墓地を抜けると、発掘報告書に「ゾロアスター教の塔」と記載された遺跡に逢着した（写真11参照）。無論、これがゾロアスター教の塔である証拠など何一つない。そもそも、ゾロアスター教の宗教構造物で尖塔型のものなど、筆者が知る限り存在しない。これは、仏教のストゥーパ遺跡ではなかろうかと、素人目にも疑わしく思える建築物の遺跡であった。

❻イシク・アタ遺跡（Issik-Ata）・・・

キルギスでの最後の調査地に選んだのは、ビシュケクから南東80キロ地点に位置する温泉保養地イシク・アタである。別に温泉に浸かりたかった訳ではなく、ここに仏教の磨崖レリーフがあると聞いたからである。これは、ゾロアスター教研究者としての疑問と云うよりは、宗教学者としての疑問を解く為であった。

と云うのも、イラン東北部（今回のシリーズでは扱わなかった）では、預言者ムハンマドまたは彼の従弟イマーム・アリーの足跡とされる「ガダムガーフ」崇拝が各地に浸透している（写真12参照）。写真をご覧頂ければお分かりのように、仏足石を想定せざるを得ない聖遺物崇拝である。これは、どのようなルーツを持つ宗教的遺跡なのだろうか？

12. ニーシャープール（イラン東北部）のガダムカーフ

ヨーロッパにも、ローマのドミネ・クオ・ヴァディス教会のように、イエス・キリストの足跡を祀る宗教施設が無い訳ではない。しかし、イラン東北部と云う地理的条件を考慮したら、イタリア半島よりはインド亜大陸からの影響の方が、可能性としては高いだろう。

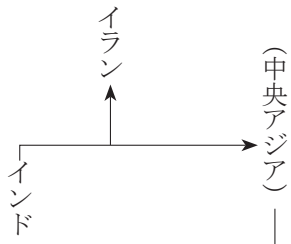
13. イシク・アタの草原

ここで、当然の如くインド亜大陸のブッダ・パダ崇拝或いはヴィシュヌ・パダ崇拝からの影響を想定せざるを得ないが、不思議なことに、中央アジアでは仏足石がほとんど見出せない。三蔵玄奘の『大唐西域記』を調べても、あれだけ仏教施設に敏感に反応する玄奘が、クチャのスバシ故城の作例以外、一言も触れていない――これは何故か？　中国～日本には仏足石があるわけだから、中央アジアに伝来していないとは考え難い。この状況を図示すると、次頁のような模式図が描ける。

14. イシク・アタ渓谷

15. イシク・アタの仏像レリーフ

【想定される仏足石の伝播ルート】



これを説明する一つの方法は、中央アジアにおける仏足石の不在を、材質の問題に還元する解釈である。つまり、中央アジアの仏教徒は、仏足石を熟知していたし、それを作る意欲もあったが、それに適した石材を入手できなかった。だから、インド亜大陸から伝播した仏足石信仰は、イランと中央アジアに伝わり、中央アジアから中国・日本に伝来したにも拘らず、肝心の中央アジアでは遺跡として残っていないのではなかろうか。このような推測を立証する為には、とりあえず中央アジアで、仏教徒が岩盤を用いて彫り起した聖遺物崇拝の作例の実見が不可欠である。いわば、中央アジアのゾロアスター教研究の側面を固めるべく、我々はイシク・アタの仏教磨崖レリーフを目指した。

＊　＊

ビシュケクからイシク・アタへ向かうと、イシク・クル湖へ行くのと同様に、標高が急激に上昇するのを感じた（写真13参照）。概ね標高１８００メートルだそうで、もう天山山脈の４合目付近まで登った感じである。付近は、中央アジアらしからぬ緑豊かな渓谷になっていた（写真14参照）。また、温泉保養地らしく、イシク・クル湖畔と同規模のロシア風ホテルが点在していた。

旧ソ連時代のサナトリウムの中を色々歩き回った末に、やっと岩場に彫られた仏像（写真15参照）を発見した。これは、同行の大西貴夫氏（奈良県立橿原考古学研究所）が、印の結び方から薬師如来像だと特定して下さったのだが、温泉保養地にぴったりの嵌り役である。現地の解説板によると、西暦８世紀に属する磨崖石仏だとある。但し、全体に彫りが浅く、また、イシク・アタ渓谷自体、中央アジアではかなり特殊な自然環境である。中央アジアの石造仏教遺跡としては、例外的な事例だろうと理解せざるを得なかった。

＊　　＊

キルギスでの調査記録はここで終わるが、最後に1つだけ触れておかなくてはならないエピソードがある。2016年9月2日の帰国に際して我々は一旦ビシュケク空港からカザフスタンのアルマトイ空港へ飛び、空港待合室で、深夜に出発する帰国便を待っていた。すると、22：00頃、彼方から杖をつきながら、日本人らしきご老人が1人で歩いて来られるではないか。

見覚えがあるような気がして凝視していたら、偶々アルマトイ空港で一緒になった山内和也氏（帝京大学教授）が、「あちらの方が、加藤九祚先生です」とご紹介下さった。何と、このとき94歳になられる加藤先生は、単独で日本から深夜便に乗ってカザフスタンに入国なさり、これからウズベキスタンに向かわれようとしていたのである。明日から、アフガニスタン国境のテルメズで発掘に当たられるとのことで、中央アジア考古学に賭けるその情熱には、脱帽せざるを得なかった。

それだけに、帰国後、加藤先生が9月3日にウズベキスタンで倒れられ、11日（現地時間）にテルメズの病院でお亡くなりになったと知った時は、信じられない思いがした。生き残った者の不遜を承知で言えば、筆者が94歳になった時―なれたとしてだが―、深夜の異国の空港で一人旅できるかと云うと全く自信がない。加藤先生は、筆者のような凡百の後輩の賛辞を浴びることには関心を持たれないだろうが、筆者としては、たった一度の邂逅の中で、無類の学問的迫力を感じさせて頂いた。

あおき・たけし｜1972（昭和47）年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士（文学）。日本学術振興会特別研究員、慶應義塾大学言語文化研究所兼任所員を経て、現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『ゾロアスター教史』（刀水書房）、『マニ教』（講談社選書メチエ）、『古代オリエントの宗教』（講談社現代新書）など著書多数。